

身体や痛みに対する注意の変化で行為の改善を認めた大腿骨転子部骨折の症例

○東山 晃司¹⁾ 佐々木 克尚^{1,2)}

1) 愛宕病院リハビリテーション部

2) 愛宕病院脳神経センターニューロリハビリテーション部門

【はじめに】

今回、防御性収縮と骨盤アライメントの崩れにより座位での荷重移動が不十分となり、靴を履く動作が困難な症例に対し、身体や痛みに対する注意の向け方に着目したアプローチを行った結果、動作の改善が得られたため報告する。

【症例紹介】

本発表に同意を得た80歳代女性である。右大腿骨転子部骨折で受傷後9日目にCMネイルを施行した。術後3週目の評価より、右大腿部外側にNRS8/10の股関節運動時痛を認め、殿筋や大腿四頭筋に防御性収縮が出現していた。しかし、会話の最中に疼痛の訴えなく右股関節屈曲運動が可能な場面があった。座位では骨盤後傾位を正中位と認識しており、右側への荷重移動の低下を認めた。そのため、右靴を履く際に踵部への上肢到達が困難であった。高次脳機能については前頭葉機能や認知機能、注意機能の低下を認めた。

【病態解釈】

痛みの破局化が生じると患者は痛みへの注意を過度に集中させ、痛みを増強させる可能性のある行動を控えようとする（仙波，2018）。症例は手術までの保存期間にせん妄状態であり、体動による患部への負荷が多く、痛みに対する恐怖の表出が強かった。そのため、疼痛に対する恐怖の繰り返しにより右股関節運動時痛に対する破局化が生じ、注意集中や過度のとらわれが形成され、防御性収縮を助長していると考えられた。

【治療戦略・経過】

防御性収縮に対し、下腿を台に乗せた支持基底面の多い臥位で股関節屈曲運動を実施した。その際、踵での素材識別を要求し、踵への注意を集中させることで痛みに対する注意の抑制を図った。座位に対しては、木製シムを用いて接触の有無や高さの差異を坐骨で認識させる課題を実施した。症例は過去に日本舞踊を嗜んでおり、心地よい思い出として記憶していた。そこから、疼痛に対する恐怖心の軽減と課題に対する注意の焦点化を目的に、その時の畳の記憶を思い出させ、快刺激として各課題に組み込んだ。その結果、股関節運動時痛NRS2/10となり、防御性収縮が軽減した。座位では骨盤後傾が軽減し、右側への荷重移動が向上することで靴を履く動作が可能となった。

【考察】

本症例は認識課題や過去の記憶想起により身体や痛みに対する注意の向け方が変化し、運動や座位姿勢の再学習が促され、靴を履く動作の獲得に寄与したと考えた。